

2010年11月資料展示

〈天保改正御江戸大絵図〉 〈東京御絵図〉

江戸は最盛期には130万前後の人口があったと言われ、徳川氏直属の家臣のほかには諸大名所属の武士および参勤交代と妻子在府の両制度のため、武士階級60万人の居住地は江戸の面積の6割におよび、この巨大な消費階級に対応するため工商の町人階級60万人が江戸に集まっていた。また徳川幕府は仏教を庇護し全国民を仏教に帰依させたので、江戸にも寺院は多く1000にも及んだと言われている。江戸市街は広大なもので、かつ市民生活の便宜よりも江戸城防備が先行していたために、複雑な区画を持っていた。江戸城の外濠は南が海、東は隅田川がその代わりをなし、北と西に数か所の諸見附（城門）があった。この外濠の内側が郭内で、大名屋敷・旗本屋敷・諸役所があり、さら郭内にも濠や見附があり、江戸城三十六見附と称されていた。



町人の居住する地域は、初期に開かれた中央区付近を中心として、街道の沿線や寺社の周囲に発達していった。寛永ごろまでの約300町は古町と称され、古町の町人は城中で行われる猿楽に入場を許されるなど優遇されていた。町数はその後増え続けて弘化四年(1847年)には1,685町に及び、人口も天保14年(1843年)の調査では553,257人、ほかに出稼人34,201人の計587,458人という統計が残っている。

(※都政史料館「天保改正江戸大絵図解説：盛時の江戸」より)

維新直後の東京は、諸大名は国元に去り、旗本・御家人は離散して、その武士階級に依存していた町人層も困窮し、人口も明治4年には58万人に激減した。市中の7割を占めていた武士階級の土地は荒廃し、山の手は昼間も女子の一人歩きは危険と言われるほどだった。

政府によって、武家屋敷のほとんどが解体され、官庁、学校、軍用地、皇族用地、政府高官の邸宅に当てられた。周辺部の大名屋敷は放置されたものも多く、輸出振興を目的に桑やお茶が植えられた。

また政府は、廃藩置県、戸籍簿作成、徴兵制などをすすめ、城門のほとんどを廃止し、東京市中の往来は格段に便利になり、江戸城東側の町人町（神田、日本橋、銀座）の中心と山の手が直接結ばれるようになった。

(※『江戸から東京へ：明治の東京』人文社 1996より)



【展示資料】(乱歩コレクションより)

1. 『天保改正 御江戸大絵図』東京都編 [複製版]
出版者：東京 信陽堂印刷 出版年：不明
1枚：122.9×135.2cm
奥書に「東武 高井蘭山図之 元禄九年丙子舊板 芝神明前
文政五年壬午補改 尚古堂 天保十四年癸卯再板 書林岡田屋嘉七」
2. 『名所絵入 東京御絵図 全』東京：児玉彌七
明治十二年[1880]刊 1枚：51.5×72.9cm